

## 書評02

伊藤 大一 著

# 『非正規雇用と労働運動 ～若年労働者の主体と抵抗』

法律文化社 / 2013 年 3 月刊 / 201 ページ / 3,900 円 + 税  
ISBN 978-4-58-903492-2

評者：加賀美 太記  
京都大学大学院経済学研究科研修員



### 若者を取り巻く労働環境

2012 年 12 月の第二次安倍政権の発足から 1 年が経った。この 1 年間、アベノミクスと呼ばれる一連の経済政策が実施され、いくつかの指標は景気回復が進んでいることを示している。たとえば、2012 年には 0.80 だった有効求人倍率が 2013 年は 0.93 へと改善した。完全失業率も、リーマンショック後の 5.1% (2009 年) から 4.0% (2013 年) へと改善している。大卒就職率は 2013 年 12 月の時点で 76.6% と 3 年連続で改善した。こうした状況を受けて、リーマンショックで大きく悪化した労働環境が、徐々に改善しつつあるという声も聞こえるようになってきている。

一方で、全労働者のうちで非正規雇用が占める割合は 3 割を越え、00 年代以降、一貫して増加を続けている。くわえて、若者の完全失業率は 25～34 歳が 5.3%、15～24 歳は 6.9% (いずれも 2013 年平均) に達しており、他世代に比べて高い。非正規の若年層にとっては厳しい状況は相変わらず、とも言えよう。

では、若者たちは自らを取り巻く労働環境にどのように向き合っているのだろうか。世間では、彼らの就労意識に問題の原因を求める「自己責任言説」や「若者バッシング」が幅を利かせ、若者自身もそうした考えで自分自身を責めているようにも見える。

「若年労働者は、労働法や労働政策によって『保護』されるだけの対象なのであろうか、あるいは彼らの就労意識の弱さを責め、批判され

るだけの対象なのであろうか。彼ら若年労働者自身に「主体」はないのであろうか。」(ii ページ)。こうした若者を取り巻く視線への問いかけが、著者の問題意識である。この問題意識を背景に、若者が取り組んだ労働運動への長期間にわたる調査を通じて、若年労働者の主体性と可能性を検討しようというのが本書の目的である。

### 本書の視角と概要

以下では、本書の概要を整理しよう。序章では、若年労働者問題の背景としての社会の構造変化と、著者の視角が提示される。まず、90 年代から続く長期不況の結果、①ケインズ主義的経済政策、②完全雇用政策、③貧弱な社会保障制度とそれを補完する企業福祉の 3 点で構成されていた「日本の福祉レジーム」と呼ばれる社会構造が大きく変化したことが指摘される。そうした構造変化の影響を真っ先に受け、かつ最も深刻だったのが若年労働者であり、彼らをめぐる様々な問題は、本質的には社会制度の問題である、というのが著者の基本的な見解である。

問題の原因を彼らの内面ではなく、社会構造にあるとした場合に考えるべきは、状況を改革するための方法である。重要なのは「働く人たち自らが主体となり、自らの働く職場の労働条件向上に取り組む」(5 ページ) ことだと著者は主張する。若年労働者がこうした課題にどのように取り組んでいるのか。以降の各章では、

この点を調査に基づいて丁寧に分析している。本書において、事例として取り上げられるのが、徳島県の非正規の若年労働者たちの労働運動である。

徳島県の自動車部品製造企業であるアイズミテックでは、多数の若者が非正規労働者（請負労働者）として就労していたが、後にかれらは自分たちの組合を結成し、ストライキをも含めた労使交渉を進め、正社員化を達成した。アイズミテックにおける正社員化の達成は、近年の労働運動のなかでも稀有な事例である。著者は、本事例はあくまで特殊な事例であると認めた上で、そうした特殊な事例を分析することで、逆に若者による労働運動の一般的な発展の条件を明らかにしようとしている。

著者の指摘する青年労働組合運動が成功した理由は以下の6点である。すなわち、①技能を含めた労働過程、②トヨタ生産方式のもとでの労働運動発展の条件、③労働管理上の問題、④既存労働組合との結合要因、⑤地域労働市場の状態、⑥請負労働者の社会関係資本、である。簡単にだが、順を追って内容を見てみよう。まず①は、技能を中心とした職務集団の形成によって、自立性を持った経営権を制限しうる労働者集団の形成に繋がったことを意味する。②は、同社の主力製品製造の中核を高い技能を持つ請負労働者が担っており、彼らの発言力が強かったことを意味する。③は、請負労働者が自分たちの労務管理を担うことになり、対立的な労使関係が形成されたことを意味する。④は、既存の労働組合も労使対立的な傾向を有しており、正規労働者組合から請負労働者組合への援助がおこなわれたことを意味する。⑤は、徳島県の地域労働市場が悪化しており、労働運動によって同社での正社員化を追求することが請負労働者にとって有力な選択肢となったことを意味する。最後に⑥は、労働者が不確実性に備えるために社会関係資本を利用しており、その一つが地元のネットワークであった点を意味す

る。また、そうしたネットワークにおけるヤンキー文化ともいべき「反学校文化」の浸透についても7章では言及されている。

終章では、こうした条件を踏まえつつ、イデオロギーとしての「自己責任論」批判と若者の主体化の一般的条件を考察している。

### 抵抗する若者たち

社会学者の古市憲寿によれば、現代の若者は世代間格差や就職難に苦しんでいると思われる一方で、実は生活満足度や幸福度が高いという。この議論は、若者はそれなりに幸せを享受している、という意味で現実を積極的ではないにしろ肯定的に描いている。現代の若者にそうした面があることは事実かもしれないが、そこにはよりよく生きるために自ら行動する主体性は見受けられない。しかし、本書で描かれた徳島の若年労働者たちは、自らの労働条件向上のためにイキイキと活動し、「幸せ」を獲得しようとしている。著者が惹かれたように、そこには若者論で批判されるような若者像とは異なる、主体性を持った力強い若年労働者の可能性が見取れる。

本書は学術書であり、一般の読者は読み難いと感じる部分もあるかもしれないが、力強く魅力的な若者たちの労働運動のあり様が、本書を読み進める手がかりとなってくれるだろう。若者論や労働運動に関心のある方々に勧めたい著作である。